

1995.1.28 札幌
柳澤明朗

私の残日録 または 残本録

戦後50年の評価といま、なにを記録するのかへのヒント

『残日』——日が西に没したのに、いまだ空を染める陽のことをいう。その言いをとった「清左衛門残日録」というNHKのドラマがいたく気に入った。隠居したお側用人の話だ。50代半ば、退職して人生の落日に至るまでの日々に、若いころ為したさまざまな事件、過ちが急に見えてきて苦悩する——実はそれが清左=仲代達也の彫りを深くして、人間の正体・本性を鮮烈に、さわやかに、そして絶妙に露出していくのだが、原作も演技も清左の人生の如くに爛熟している。

以前から言っているように、もともと藤沢周平の人間のディテールとその束が描く世界には脱帽していた私は、めまいしながら見つづけた。私自身が退職、人生の終着駅行きコースに入ったことも重なっているかもしれない。

だが、この極上の人間のリアリティーに、ふっと距離を感じた。開高健の『声の狩人』に出会ったからだ。思うにこれから述べていく理由からだが、それは、今日どんな事実を、なぜ、どう描くかにかかわっているように思えるので、記録しておきたい。戦後50年のとらえかたや問題が多様に展開されているのだが、この機会になにを記録していくかにもかかわることでもある。

棄本——捨てた本と残した本の別れ路

会社での私物整理のときにも、我ながらどきりとしていたのだが、本を捨てた。後生大事にしていた本を改めてみて迷いが全くなしに捨ることができて、怖くなったほどであった。こんなことは一度も無かったことだ。過去の過ちの集積のように思えて、さっぱりとできた。

家でも、1500冊ほどだろうか、3回ほど捨てた。50年の歴史に暴かれて、起きている事実、あるいは結果と全くかけ離れている内容の論を満載している本がこんなに多く存在していたのか、と驚くばかりであった。予見も科学性もあったものではない。社会科学から小説などもふくめ各分野に及んだ。人生の選択にその時は、やはり決定的な影響を与えたものもかなりあることが、私をとてつもなく悲しい思いにさせた。

気がつく、残す本が二極にわれていた。そのひとつは、今になってみると時代の事実、評価から最も離れて、観念的課題、演説に終わってズレているものと、逆に部

分的、断片であっても時代を記録できているもの。また、その時代の人間が生きていて、人間存在がみえるものと、人間の影すらみえないものの双方だ。

時代と人間不在のものをも同時に選んだのは、いかにして国家や組織、集団が虚偽の論理で事実、真実の偽造をしていくのかを証すものを残しておく必要を思うからだ。それは直ちに私自身が、その哲学、人間像やそれにつながるかわりをふくめて、タレ流しの観念論に誠実に染まっていたかということへの恥じさらしになることでもある。戦後50年でも実にいっぱいあった。人類史がきづいた近代の知性と批判的精神、魂の自由と無縁な、非人間がある。

開高の憶病にすらみえる事実の把握とその評価について、一方で、躊躇しながら出している人間存在への疑問、核とエネルギーについて、ナチズムや民族問題などを含む近代の社会システムについて衝撃を受けたから、余計に非知性がいやになる。

ただ、その事実、歴史について、たとえばソビエトの核実験について、自分も最初には開高と共通の疑問をもったことが唯一の救いなのだが、次第に上から流される情報にならされ、結論はタレ流し情報に安住してきていた自分をみいだす。

「フオイエルバッハ論」13回目を読了。収集、整理、諸関連の近代科学の方法を争議分析・記録の方法論に適用すること発見とか、「世界労働運動史2巻」7回目読了などのメモがある。読み方のイヤミにみちた知識つめこみ発想とか、社会科学は100の約束事がわかって初めて創造、応用の1%がはじまるのだ、という伝統的発想、読書法を示している。加えて、その内容が朝鮮戦争、キューバ、プラハの春、インドネシア革命の崩壊、チリ革命、ユーゴ、ルーマニア、ベトナム、中国、ロシア、東西独問題などをめぐる運命、運動について、それこそ1%でも事実や予見や評価がみえなかったように見えるほどの変化をしていることを思った。だれがではなく通説であり、その崩壊でもあった。

今になってみると、中間の、ほとんど時代と人間、事実について、薬にも毒にもならない観念論、つまりなにもいっていなかった本や雑誌を気持ちよく捨てた。

激変の質

さて、清左の人生観、価値観は激動する。正邪逆転したかと苦悶する。若きころ正義実現、主君への忠誠心の名においてなしたこと、また、異常といわれる出世が結果原因となった同輩周囲へ為した仕打ちなどが、いま思うと、他者の人生を狂わせてしまったかもしれないという責め、問いかけが頭を持ち上げてくる。

私もまた、情熱と誠実で突き当たれば何事も実現した、少なくとも、そう信じられるほどにやりたいことができた。われこそ正義を体現しているとの確信で、当るを幸いの態で、主観的真実を真っ正面から記録しつづけた。走りに走った。実に身にあまる愛されかたを多勢から受けたことがそれを可能にした。そしていま、清左の如くに苦悶する。

かなりの人生の期間、正義も理想も一つですんでいたのだが、やがて、一つの思想、事実が通用する時間、年月がとても短くなってきていたことを感じていた。私にとって、その最大のものがベルリンの壁の崩壊とこれにかかわってそれ以後起こっていったことが引き金だった。

もっとも、それまでも中ソ論争や武闘、核問題、石炭から石油文明の時代変化、高度経済成長とその逆転の時代評価、日本型企业社会の成立と評価、技術革新、情報化時代の把握、アフガン侵略などベトナムを含めた「社会主義国」の一連の侵略などの正体が、すでに足早となる時の流れに洗い出され、正体を出してきていて、科学が政治、イデオロギーの力学でゆがめられたりしているようで、不安と衝撃に追われつつであったのだが、近代社会4回目の89年のこれは価値の^Y転換を含んでいた。^櫻

・方法論

ここまでが清左と同じで、ここらあたりから清左と異なってくるように思える。つまり、清左は自己の人生、たかだか藩制の範囲やその世界での「波乱万丈」のできごとであった。

私の場合の苦悶は、近代社会、少なく見積もっても17世紀からの400年、いわば人類史が到達した到達点、専門職があるいは文化遺産が継承し伝えてきた情報、その論理とか、体系とか、枠組みへの問い直しを含むものであることだ。そうゆう質(たち)の問題が、歴史の事実^{1689年}に試されたときによくそれに耐えられず、予見も、事実の把握もとんちんかんだったことを、何ヵ所にも露呈していることがみえてきた。そのことを短期間にあけすけにみせるほど、歴史のテンポが早く、事実が示してしまっていたことを意味した。1689年(権利憲章。フランス革命。明治憲法。)以来、近代の4回めにやってきた89年は、^{1689年} 阪神大地震がやったように、^{1789年} 各種の既成の安全神話を事実で破壊した。^{1889年}

このときに、なにを、どう記録していくのか。とりあえずの結論を急いで言ってしまうと、つぎのようになるだろう。

対話、参加、ともに生きて創った情報、事実を記録していくことだ。こうした性格を欠いた情報は無価値というか、評価できない発想だ。

結果よりも、参加して創造していく過程そのものに価値をおき、その過程に生じる人間関係、生活そのものに価値を見出していく哲学だ。小さくてもよいから等身大に

手作りで、無数に創られる事実がもつ価値が確かなものだ。これまでの社会で、見捨てられてきていた日常性、生活性、多様で非法則的なものだが、生活のなかにあるマグマのようなバイタリティーの存在にこそ価値をみる発想であるように思う。観念、体系から事実をみたり、そこへ事実をあてはめていく捏造の科学や記録ではなしに、事実からの発想、出発、発見と創造の記録でありたいものだ。

知識も論理も体系も、組織も、その論理からの建て直しを迫られているのではないか。そうした目線を見た場合、朝日新聞元旦の加藤周一と大江健三郎対談で、「市民運動が命綱」「核軍縮の訴えを世界に」とし、日本の民主主義を救うのは市民運動であり、マスメディアに対抗できるのは、ミニコミの発達だ、「ともかく、主体は市民の小さなグループだな」、という発言が、ヒントに思えてならないところである。